

平成 30 年 5 月 11 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780506

研究課題名(和文) 幼稚園における異年齢児交流に着目した子どもの造形表現の展開過程に関する研究

研究課題名(英文) Formative Expressive Behavior in Children's (4 years old and 5 year-old) Artistic Play Activities

研究代表者

村田 透 (MURATA, Toru)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：30469473

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、異年齢児が交流する造形表現活動を通して幼児が身の周りの環境との関係性の構築や意味世界を生成する過程を明らかにすることである。明らかになったことの1つ目は、子どもは材料や出来事の固有の意味をつくり、アイデンティティをつくる。2つ目は、活動の場は3つの次元(重要な他者との関係、外界との関係、社会文化環境との関係)が相互に規定する関係性で成り立ち、子どもの<自分の心>を育む場となる。3つ目は、造形表現活動において子どもは探究をして、意味世界の生成過程に連続性や発展性が生じる場合がある。4つ目は、子どもの探究による理解は、子ども達固有の文化的価値の受容と創出と表裏一体となっている。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the process of children's formative expressive behavior. The observation and video analysis yielded several conclusions. First, it was observed that during the creative activity, the children used the tools and materials in original ways to create a variety of shapes. This behavior demonstrates characteristics of self-identity growth. Second, the activity consisted of three core elements: relationship with the teacher; relationship with friends, materials, and events; and relationship with society and culture. These three elements can have the relationship of an interaction. Third, children became aware of problems and tried to explore solutions thereof. Fourth, children's exploratory behavior occurred in relationships amongst themselves where they received and created values and problems.

研究分野：教科教育学(図画工作、美術)、保育内容(造形表現)

キーワード：図画工作 造形表現 幼児教育 相互行為分析 意味生成 探究 造形遊び エピソード記述

1. 研究開始当初の背景

保育内容（造形表現）や教科教育学（図画工作、美術）においては、平成元（1989）年改訂の学習指導要領の「新しい学力観」（個性と基礎・基本はともに育つ）や幼稚園教育要領の「遊びを中心とした総合的な指導」が提唱されて以降、学校教育における「生きる力」（および乳幼児の「生きる力の基礎」）を育む理論構築と教育の体系化を目指す研究動向がある。

主な研究領域を取り上げると、理論研究、カリキュラム・評価の開発・分析研究、授業・事例分析研究を挙げることができる。

本研究は、子どもの造形表現に関する実践・事例分析研究である。この研究領域は教育に関わる諸理論（発達心理学、現象学、相互行為論、状況的認識論等）を取り入れ、子どもの造形表現行為の意味を子どもの観点からとらえ返し、身の周りの環境（もの、こと、人）との関係性の構築や意味世界の生成の視点から分析・考察するものである。

この研究領域は平成20（2008）年に改訂された幼稚園教育要領に示された「幼児や教師との関係性」「素朴な形で行われる幼児の自己表現」「表現する過程」の在り様を明らかにし、「作品主義・結果主義」を見直し、「遊びを中心とする具体的な活動を通した総合的な指導」の実現に資すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は幼稚園における異年齢児（4、5歳児）が交流する造形表現活動の場において、子どもが身の周りの環境（もの、こと、人）との関係性の構築や意味世界を生成する展開過程と、異年齢交流の経験や学びが日常の遊びに作用する展開過程を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

平成26（2014）～29（2017）年度の4年間、申請者と幼稚園が連携して、「時間外保育」などを活用した造形表現活動を随時・継続的に実践する。そして子どもの行為をビデオやカメラで記録し、相互行為分析やエピソード記述の手法を用いて分析・考察する。それと共に幼稚園での日常の遊びの在り様も同手法で記録・分析する。

加えて保護者を対象としたインタビューやアンケートや便りの配布等の機会を設け、幼稚園での経験や学びが家庭での生活や遊びに作用し展開していく在り様も明らかにする。

4. 研究成果

(1) 環境と相互作用して展開する子どもの造形表現行為に関する研究（2014年度）

本研究では、子どもの〈意味〉生成行為と保育者の指導・援助方法との関係性に着目して、造形表現活動の場が〈実践共同体〉として成立する過程を明らかにすることが目的である。

そのため大人が発達心理学的還元の態度をとり、子どもの造形表現行為の場をつくり出していくことを試みた（4～5歳児を対象としたジョイント式マットを用いた「造形遊び」）。さらに子どもの行為の分析・考察をするために、浜田寿美男の「三項関係による意味の敷き写し」の理論、松本健義の「出来事の生成としての学び」の理論、鯨岡峻の「〈自分の心〉の成り立ち」と保育者の「育てる働きの二つの柱（「養護の働き」と「教育の働き」）」の理論を援用して分析・考察をする。

本研究で明らかになったことは、子どもは造形表現活動において、ジョイント式マットを固有の意味あるものとして対象（記号・道具）化し、新たな出来事をつくり出していた。つまり文化的—経験・活動的世界の〈意味〉の相互生成である。さらに、保育者と子どもは、経験を〈共有する〉という相互志向性によって、個々のアイデンティティや役割を協働的につくり出していた。つまり文化的—経験・活動的相互生成である。

保育者の「養護の働き」と「教育の働き」に支えられて、子どもたちは身の周りの環境（もの、こと、人）へ主体的にかかわり、〈意味〉を生成し、〈自分の心〉（「私は私」の心と「私は私たち」の心）をはぐくんでいる。その子どもの姿が、保育者の「自己充実欲求」（達成感や成就感など）と「整合希求欲求」（連帯感や思い遣る心など）へ作用し、保育者の〈自分の心〉をはぐくんでいる。

子どもと保育者は対話的にお互いの〈自分の心〉をはぐくみ、造形表現行為の場〈実践共同体〉となっていた。

(2) 幼児期の子どもの造形表現行為と保育の場に関する研究（2015年度）

本研究の目的は、保育の場における子どもの造形表現の「事象そのもの」を明らかにすることである。

そのために「発達心理学的還元の態度」と「臨床的還元」をしながら、子どもの造形表現（4～5歳児を対象とした紙製パイプを用いた「造形遊び」）を「関与観察」をして、子どもの行為をエピソード記述として記録した。さらに子どもの造形表現行為を松本健義の「出来事の生成としての学び」と鯨岡峻の「〈自分の心〉を規定する3つの次元」の理論を援用して分析・考察した。

本研究で明らかになったことの1つ目は、子どもは造形表現活動において、材料（パイプやジョイントパーツ）を自分にとっての固

有の意味あるものとして対象（記号・道具）化、新たな出来事（「家ができる」「梯子ができる」等）をつくり出すということである。さらに子どもと保育者は表現過程で個々のアイデンティティや役割を協働的につくり出していった。つまり「出来事の生成としての学び」における文化的—経験・活動的—社会的世界の〈意味〉の相互生成である。

明らかになったことの2つ目は、幼児期の子どもの「出来事の生成としての学び」は、「①重要な他者との関係の次元」における保育者の「養護の働き」と「教育の働き」を支えとして成り立っている。そして子どもは保育者の働きを支えとして、「②外界との関係の次元」でヒト・モノ・コトとかかわり、保育者への信頼感や繋がる喜びを抱きつつ、自己効力感・自己肯定感・意欲をはぐくむ。

さらに「①と②の次元」は、「③社会文化環境との関係の次元」に規定されている。それは子どもが保育者の支えを得ながら文化を獲得して自己の可能性を開くことを大切にしたい「環境を通した教育」の特質がある保育の場の構造。「模倣遊び」を可能とする日常生活における物的環境や人的環境。「模倣遊び」を共有できる子どもと保育者の社会文化環境である。以上のありようで保育の場における造形表現活動は、「①と②と③の次元」が相互に規定する関係性を背景にして、子どもの〈自分の心〉をはぐくむ場となっていることが明らかとなった。

(3)「造形遊び」の題材における幼児の造形表現過程に関する研究(2015年度)

本研究は、「素朴に見える形で行われることが多い」幼児期の子どもの造形表現過程の具体性を明らかにすることが目的である。

そのために、4歳児と5歳児を対象とした紙製コースターとクリップを用いた「造形遊び」の題材を実践し、子どもの表現行為のありようを「関与観察」して、エピソード記述としてまとめた。そして松本健義の「出来事の生成としての学び」、花篤實・岡田愨吾・辻正宏らの「幼児の造形表現活動の分類」、松岡宏明の「造形活動の構成の要素」の諸理論を援用して分析・考察した。

明らかになったことの1つ目は、「造形遊び」の題材において、子どもは身の周りの環境（もの・こと・人）と相互作用して自らの表現をつくり、3つの世界（文化的世界と社会的世界と経験・活動的世界）の〈意味〉を相互に生成しているということである。

明らかになったことの2つ目として、「造形遊び」の題材における子どもの表現は、多様な特徴（「材料遊び」「操作遊び」「構成遊び」「模倣遊び」）がある〈いま—ここ〉によ

って成り立っており、多様なくいま—ここ〉の表現が入れ替わり立ち代り生じていた。

明らかになったことの3つ目として、「造形遊び」の題材における子どもの表現行為は、多様な特徴がある〈いま—ここ〉の表現が、次の〈いま—ここ〉の表現を誘発して、表現過程に連続性や発展性が生じる場合があるということである。

(4)子どもの造形表現活動における課題探究について(2017年度)

本研究は、「造形遊び」の表現過程に連続性や発展性を生じさせる子どもの論理に基づく探究の仕方（理解の仕方）を明らかにすることを目的としている。そのために小学生対象とした紙コップを用いた「造形遊び」を実践し、子どもの行為を「関与観察」して、エピソード記述としてまとめた。そして松本健義の「出来事の生成としての学び」と佐伯胖の「課題探究の多重構造」の理論を援用して分析・考察した。

明らかになった1つ目は、「造形遊び」において、子どもは身の周りの環境（もの・こと・人）と相互作用して、3つの世界（文化的世界と社会的世界と経験・活動的世界）の〈意味〉を相互に生成するというのである。

明らかになった2つ目は、「造形遊び」における子どもの表現は、多様な特徴（「材料遊び」「操作遊び」「構成遊び」）がある〈いま—ここ〉で成り立ち、多様なくいま—ここ〉の表現が入れ替わり立ち代り生じていた。

明らかになった3つ目は、子どもは「わからない」状態から「わかる」状態にむけて活動し続ける課題探究をして、造形表現過程に連続性や発展性が生じる場合があるということである。子どもが創出した多様な〈意味〉群は、瞬間瞬間の現在である〈いま—ここ〉でつくった内容の異なる〈意味〉群である。子どもは表現過程で〈意味・価値〉に気付き、〈意味・問題〉を創出し、「わかからない」状態から「わかる」状態にむけて、課題探究をはじめめる。その表現過程において、多様な〈意味〉群が「課題解決」「方略選択」「自己、視点」「展開」というさまざまな層（レベル）に位置付けられて、それらが順次問われ答えられていくことで、子どもは「なるほど」と受け入れ、理解するに至る。

明らかになった4つ目は、子どもの課題探究の場は、一人で構成されてはいない。子ども達は個々に〈意味〉をつくりつつ、お互いの〈意味〉を取り込んだり、自他の〈意味〉を関係付けたりして、〈意味・価値〉に気付き、〈意味・問題〉を創出し、彼らの場に固有の文化的価値をつくる。A児の課題探究による理解（「わかった！」）と子ども達固有の

文化的価値の受容と創出とは、表裏一体となっている。

- (5)環境(モノ、人、コト)と相互作用して育まれる子どもの「探究」と「思考力の芽生え」(2018年度)

本研究は「思考力の芽生え」が生じる幼児期の子供の論理に基づく「探究」の仕方(「わからない」状態から「わかる」状態に向けて、どのような視点で物事を思考・判断・表現し、課題を発見し解決して納得に至るのか)を明らかにするために、3件の造形表現活動の事例を採り上げ分析・考察をした。対象児はA児(年長、男児)を中心とした事例である。

【事例1】「ビー玉転がし」は、A児一人での「探究」場面である。A児は自ら「主題」を設定し、ビー玉がスムーズに転がるように「試行」をし、それに応じた「結果」を受け止め、「発見」したり「予測」したりして、やがてA児は「主題」が実現可能となる「条件」に気付く。

【事例2】「虫づくり」は、A・B・C児による比較的ゆるやかな人間関係による「探究」場面である。A児は、C児の発案(もしくは独り言)を受け止め、自らの「主題」とする。自分の虫が「カブトムシ」となるように材料・用具を用いて「試行」をし、自分とは異なる表現世界(B・C児の「飛ぶことができるトンボ」)に触れて、自分の「カブトムシ」に足りないものに気付き、新たな「主題」(「飛ぶことができるカブトムシ」)を生み出し、その実現に向けて「試行」を続ける。この「探究」の事例は、3人による「飛ぶことができる虫」という表現世界(彼らなりの「文化」)を共有する過程という側面を有する。

【事例3】「電車づくり」は、集団(A・D・E・F児)の構成員の力関係が時には強く作用する「探究」場面である。A・D児は、お互いに了解した形で共通の「主題」を設定する。個々に「特急電車」の先頭部分(運転席)をつくるが、やがてD児が新たな主題「連結できる車両」を提案し、A児はD児の主題・提案を受け入れる。さらにA・D児は、お互いの「特急電車」の正当性を主張する(A児「新しい特急電車」、D児「図鑑のような特急電車」)。この「探究」の事例は、個々に自分の思いを伝え合い、提案・了解したり、時には正当性を主張したりすることで、共通の表現世界(彼らなりの「文化」)をお互いに楽しめ、かつお互いが共有するに値するものとしていく過程という側面を有する。

以上のように、小学生に限らず幼児においても造形表現活動において「探究」する姿がみられ、その背景には幼児期なりの「思考力の芽生え」がある。そのような幼児期の子

もの「探究」や「思考力の芽生え」は、教員集団による子供の興味関心の把握や、一人や複数での「探究」が可能となるように子供の成長を見守り・支え・省察することによる保育の場(題材、用具・材料など)の設定に支えられている。

以上の成果から明らかとなった本課題研究の成果は、以下5点である。

- ① 子どもの造形表現行為は、重要な他者(保育者)との関係の次元と、外界(ヒト・モノ・コト)との関係の次元と、社会文化環境との関係の次元が相互に規定する関係性によって成り立つ。保育の場における造形表現活動は、この3つの次元の関係性を背景にして、子どもの<自分の心>をはぐくむ場となっている。
- ② 造形表現行為を通して、子どもは身の周りの環境にかかわり、材料や出来事の固有の意味をつくり、自分のアイデンティティをつくるということである。つまり子どもは造形表現の場において、3つの世界(文化的世界、社会的世界、経験・活動的世界)の<意味>を相互に生成している。
- ③ 子どもの造形表現(特に「造形遊び」の題材において)は、多様な特徴(「材料遊び」「操作遊び」「構成遊び」「模倣遊び」)がある<いま—ここ>によって成り立っており、多様な<いま—ここ>の表現が入れ替わり立ち代り生じる。
- ④ 「造形遊び」の題材において、子どもは「わからない」状態から「わかる」状態にむけて活動し続ける課題探究をして、造形表現過程に連続性や発展性が生じる場合があるということである。幼児期における探究は、「思考力の芽生え」が背景となっているものの、保育者による子どもの育ちの把握や指導や支援、保育の場(題材、用具・材料など)の設定に支えられている。
- ⑤ 子どもの課題探究による理解(「わかった!」)と子ども達固有の文化的価値の受容と創出とは、表裏一体となっている。

課題として、造形活動において異年齢児が交流する場面も見られたが、それによる身の周りの環境との関係性の構築や意味世界の生成に関して、大きな効果や変化を見出すことは難しいものであった。理由として、観察対象である造形活動の場面が断片的であったことがあげられる。日常の保育の観察もあわせて継続的に記録・分析をすることで、異年齢児の交流による効果や変化を見出すことができる可能性があると思われる。ただし、集団より個別であることを好んだり、自らの興味

関心に基づいて行動をしたり、気に入った友達や保育者との関係が重きを成すという幼児期なりの人間関係の特徴も留意しながら異年齢児交流に着目することが必要であると推測される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 村田透(2018)「子どもの造形表現活動における課題探究について：小学生を対象とした「造形遊び」の題材より」、美術教育学 39号、査読有、pp. 329-346
- ② 村田透(2018)「環境(モノ、人、コト)と相互作用して育まれる子供の「探究」と「思考力の芽生え」」、国立大学法人滋賀大学教育学部附属幼稚園 研究紀要 46号、査読無、pp. 131-136
- ③ 村田透(2016)「「造形遊び」の題材における幼児の造形表現過程に関する研究」、美術教育学 37号、査読有、pp. 415-428
- ④ 村田透(2016)「幼児期の子どもの造形表現行為と保育の場に関する研究—4、5歳児を対象としたパイプを使用した題材から—」、美術教育学研究 48号、査読有、pp. 385-392
- ⑤ 村田透(2015)「環境と相互作用して展開する子どもの造形表現行為(2)—4歳児と5歳児を対象としたジョイントマットを使用した活動から—」、美術教育学研究 47号、査読有、pp. 367-374

〔学会発表〕(計4件)

- ① 村田透(2018)「子どもの造形表現活動における課題探究について：小学生を対象とした「造形遊び」の題材より」、第40回美術科教育学会(滋賀大会)
- ② 村田透(2016)「「造形遊び」の題材における幼児の造形表現過程に関する研究」、第38回美術科教育学会(大阪大会)
- ③ 村田透(2015)「幼児期の子どもの造形表現行為と保育の場に関する研究—4、5歳児を対象としたパイプを使用した題材から—」、第54回大学美術教育学会(横浜大会)
- ④ 村田透(2014)「環境と相互作用して展開する子どもの造形表現行為—4、5歳児を対象としたジョイントマットを使用した活動から—」、第53回大学美術教育学会(福井大会)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

特に無し。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 透 (MURATA, Toru)
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：30469473